

法王フランシス：地獄は存在しない

法王のこのコメントを受け、バチカンが狼狽

【訳者注】この論文は、法王フランシスのこの重大発言から、過去の神学者たちの「地獄」についての見解を解説してくれる点で大いに啓発され、また、彼の無神論者の友人との関係を教えてくれる点で、大いに役に立つ。しかし、なぜ、フランシスが「地獄は存在しない」と言い、神の審判よりも、神の慈悲を強調するのかについては、はっきり書かれていない。法王フランシスが、New World Order の側に立っているのは明白であり、この発言も、良心を捨てて NWO に加担する者たち、またサタン教に転向する者たちの、不安を取り除く意図があるのは明らかだと思う。彼が、聖職者のペドフィリア犯罪者に、あきれるほど寛大であることから、それはわかる。

今まさに起ころうとしている/すでに起こっている戦争は、明らかに神とサタンの、善と悪の戦争だから、地獄のあるなし、地獄が永遠か否か、そもそも地獄とは何かの問題は、誰も避けて通ることはできない。現在の世界の危機は、ただの政治や経済の危機ではない。

Jay Greenberg | @NeonNettle

March 31, 2018



法王は地獄の存在を否定した、と言われる。

バチカンは、法王フランシスが「地獄は存在しない」と言って、キリスト教の根本を骨抜きにしたために、パニックに陥っているとされる。

バチカンの外務局は、過去数週間、スキャンダルを抑え込むために周章狼狽している。

外務局主任の Dario Vigano は、バチカンが、法王フランシスの地位資格を保護するために、法王ベネディクト 16 世からの手紙の写真を、加工したことを認めた後、圧力のために辞任した。 <https://www.vox.com/2018/3/19/17125476/vatican-doctored-photo-pope-francis-conservative-fake-news>

現在、法王フランシスが、あるイタリアのジャーナリストとのインタビューで行った発言が、一般に知られるようになった。

バチカンの役人たちは、今、法王が、イタリアの新聞 La Repubblica の記者との話の中で、地獄の存在を否定したと言われることを受け、そのダメージを抑え込もうと、奮闘している。



法王フランシスは、地獄の存在を否定したために、攻撃を受けている。

この新聞の創設者で、ジャーナリスト、無神論者の Eugenio Scalfari に話しながら、フランシスは、重罪を犯して死ぬ者について、こう言ったといわれている：――

<https://www.vox.com/2018/3/30/17179952/pope-francis-hell-vatican-interview-scalfari-italian>

「彼らは罰せられない。悔い改める者は神の許しを得、彼を予測していた者たちの仲間になる。しかし悔い改めず、許すことのできない者は、消えてなくなる。」

「地獄は存在しない。罪を犯した魂の消滅の事実は存在する。」

もし法王が本当にそう言ったのなら、その結果は、カトリック教会にとって、甚大な打撃となるであろう。教会は、それ自身の教理問答によれば、「永遠の火」を含め、「地獄とそれが永遠なることを肯定する」、ただし、それが特に強調するのは「地獄の最大の罰は、神からの永遠の隔離」ということである。http://www.vatican.va/archive/ENG0015/_P2O.HTM

バチカンでは、スカルファエリを直ちに批判して、この記事の引用部分は、「法王の言葉の忠実な書き写し」ではないと言った。<http://www.vaticannews.va/en/pope/news/2018-03/pope-francis-article-repubblica-press-release.html>

これは、スカルファエリ——自他ともに認める無神論者——が、法王フランシスの言葉だとして公表して、論争を引き起こし、バチカンが後でそれを取り消した、最初の例ではない。

フランシスの、スカルファエリとの継続的な関係は、このような論争にもかかわらず、フランシスの神学とともに、彼のオーソドックスでないメディアとの接触を語っている。



論争にもかかわらず、法王フランシスは聖金曜日を祝賀する。

スカルファエリと法王の長い関係

スカルファエリ——法王の長い友人で、知的スパーリングの相手——は、しばしば、彼の非オーソドックスな会見を自慢する。彼は、記録デバイスも使わず、ノートも取らない。

むしろ彼は、法王との会話を記憶から再構成する方法を取る。これは過去において、スカルファエリを、バチカンとの熱い論戦に持ち込んだ。

2013年のスカルファエリとのインタビューで、法王は、非カトリック教徒を改宗させる試みを、「厳粛なナンセンス」だとして退け、「カトリックの神という

ものはない」と言った。

http://www.repubblica.it/cultura/2013/10/01/news/pope_s_conversation_with_scalfari_english-67643118/

バチカン、ただちに、そのウェブサイトから、インタビューの原文をこっそり削除した。そこには、すべての法王のインタビュー記事が載っている。

2015年には、スカルファーリは、法王が声に出して、罪びとは地獄に落とされるのではなく、「無化される」のではないだろうか、と言っていたと報告した。バチカンは、この引用文を「公的なテキスト」と考えるべきでないと言った。

<https://rorate-caeli.blogspot.com/2015/03/exclusive-translation-newest-papal.html>

<https://www.lifesitenews.com/blogs/about-that-pope-francis-interview-where-he-denied-the-existence-of-hell>

別の会話で、スカルファーリは、フランシスは、「離婚者で聖体拝受を求める者は、すべて認められる」と考えているようだと**言った**。これは、バチカンが直ちに否定した。

<https://www.lifesitenews.com/news/italian-journalist-pope-francis-told-me-all-the-divorced-who-ask-will-be-ad>

<http://www.catholicherald.co.uk/news/2015/11/02/italian-newspaper-pope-says-all-divorced-who-ask-will-be-admitted-to-communion/>

法王のスカルファーリとの関係は、バチカン外務局の方針を困難にする

フランシスが本当に、地獄はないと言おうとしているのか否かの問題は、したがって、より大きな問題に従属する：——なぜ、フランシスは、繰り返し、スカルファーリとインタビューを行い、後で、それは彼の引用の間違いだったと言うのか？

カトリックのコラムニスト Ross Douthat は、フランシスのスカルファーリとの友情を、一種の情報拡散の「裏口」的方式だと言っている。

Douthat は、フランシスは、非オーソドックスな、神学的なアイデアを考え出して、ある程度、民衆へのリークという形を用い、一方で、否定の可能性も残しておくのかもしれない、と言っている。

Douthat は言っている：——「フランシスは、この種の故意に確かでない伝達方法に、利点

があると見ている。その形は、非信者との空回りの対話によって、信者に非常に非公式的に伝達するか、あるいは単に、気軽な話し方によって、正式のインタビューなら必ず受けるはずの、厳しい批判をかわす、というやり方を取った。」

確かに、スカルファーリの音声記録を聞けば、フランシスが敏感な話題で、引用されたり、誤って引用されたりする可能性に、気づいていないとは考えられない。

したがって、彼が、スカルファーリのインタビューを受けるという選択は、2人が交わした言葉の正確な内容と同じくらい、重要なことだった。

フランシスの見方は、キリスト教徒の間に全くないわけではない

フランシスが地獄を退けるのは、彼の教皇職のより深いテーマにつながっている。すなわち、神の審判よりも、神の慈悲をほめ奉るという考えである。

そして神学的に言うと、フランシスの見方は、左翼的な方面に全く見られないわけではない。

より広いキリスト教の伝統の内部では、神学者たちは、「火の湖」という伝統的な見方を超え、さまざまな形で、地獄のアイデアに反応してきた。

いろんな代替解釈の中には、宇宙的和解（すべての魂は究極的には救われる）、あるいは消滅（救われない魂は存在をやめる）といったものがある。

紀元2、3、4世紀——教会教義がまだ法典化していなかった、動的な知的探求の時代——の初期教会では、神学者たちは、しばしば異なったアプローチを取っていた。

例えば、アレクサンドリアのオリゲネスや、ニュッサのグレゴリオスは、和解の見方をとり、リュオンのイレナエウスは、消滅と考えられるスタンスを取っていた。

<https://www.iep.utm.edu/origen-of-alexandria/>

<http://www.newadvent.org/cathen/01599a.htm>

<http://www.rethinkinghell.com/2014/10/hell-in-the-times-were-the-early-church-fathers-vague-in-their-support-of-conditional-immortality/>

5世紀には、地獄についてのキリスト教教義は、ヒッポの聖アウグスチヌスの巨大な影響もあって、より合理化された。 <http://www.newadvent.org/cathen/07207a.htm>

しかし 19 世紀中期以降になると、現代の神学者たちは、ミケランジェロの「最後の審判」から出たものには見えない、地獄の観念に戻り始めた。

20 世紀だけでも、新正統派のスイス神学者 カール・バルト から、ルター派の実存主義者 パウル・ティリッヒ や福音派の クラーク・ピノック のような、重要な神学者たちが、「永遠の火と硫黄」というよく知られた考えに、挑戦し乗り越える、地獄や永罰の、さまざまなモデルを探求した。<http://www.newadvent.org/cathen/07207a.htm>
<https://www.commentarymagazine.com/articles/the-religion-of-paul-tillich/>
<http://www.patheos.com/blogs/jesuscreed/2011/10/13/clark-pinnocks-thoughts-on-hell>

それでも、これら現代の神学者たちは、大抵は、カトリックのような、一様な、形式化された構造や法典化された教義をもたない、プロテスタントの伝統につながっている。

そうは言っても、最近の主要なカトリック思想家の一部は、一般に理解されている地獄の考え方に戻っている。

1980 年代に、スイスの神学者 Hans Urs von Balthasar は、著書『すべての人間が救われるとは厚かましい希望ではないか？』で、(カトリック伝統との) 和解を試みている。また、論争を好む Hans Kung の 1984 年の『永遠の人生』は、地獄は、肉体的な苦しめでなく、神の不在のことにすぎないと理解すべきだと言っている。

しかし、カトリックの教理問答という形式そのものが、何であれ、この問題についての公的な法王の宣言を、あやふやなものにしている。

フランシスの「ダブルスピーク」(二枚舌) が彼を危うい立場におく

しかしフランシスは、一種の餌と鞭を使うことで——潜在的異教の考えを述べ、次にそれを形式的には否定することで——不誠実のそしりに身をさらしている。

それは抜け目のない政治的なやり方である。しかし、それはカトリック教会の中央集権化された、形式的団体としての性格を、不安定化させるもの、すなわち、カトリック教会を、他の西洋のキリスト教諸宗派から、引き離すものである。

前に私が書いたように、フランシスの、教会の官僚制に対する嫌悪と、世俗的なメディアと

組んで、自分のメッセージを伝えようとする意欲は、彼の法王の地位を利すると同時に、危うくするものでもある。<https://www.vox.com/identities/2018/3/13/17107702/pope-francis-divisive-papacy-explained-five-years-catholic-church>

時には、彼の“乱暴を働こう”とする意欲は、効果を持つこともある。

例えば、彼が質問を受けて、LGBTQの人々に答えた、「私は判断する立場にない」という言い方は、公的な教会教義に挑戦することなく、求める人々に慰安を与えることができた。<https://www.vox.com/identities/2018/3/13/17107702/pope-francis-divisive-papacy-explained-five-years-catholic-church>

しかしこの場合には、教会の正統思想に直接、挑戦しながら、保守派の批評家を怒らせる、ちょっとやり過ぎの、フランシスの方法だったかもしれない。

バチカンの、次第に激しくなる論争に対する解決策は、ひたすら、フランシスとスカルファエーリのやり取りを、否定することだったが、フランシスが、あくまでも、スカルファエーリを潜在的な代弁者として用いることによって、否定するごとに、それは少しずつ説得力を失っている。

——以上